

## 投稿論文の書式、参照文献表、注について補足(内規) (英語学論文用)

制定：2012年9月23日

改正：2014年3月3日

英語教育で論文を執筆される方は、2016年4月1日に新内規が施行されていますので、そちらをご参照下さい。

『日本英語英文学』の論文書式について、基本的には諸先生方が普段用いられているスタイルが尊重できるような緩やかなものを考えておりますが、全体の統一という観点から、また経費の節減という事情もございまして、以下の諸点を共通の書式として頂ければ幸いに存じます。以下、学会誌、学会ホームページ上で公開されている「投稿規程」、「投稿論文の書式」と重複する部分も少なからずありますが、どうぞご了承下さい。なお、本内規制定にあたり、従前の「書くための指針として(内規)」は特に英米文学論文用とされましたが、英語学で論文を執筆する際にも重要な事項が書かれておりますので、そちらもご参照下さい。

### 1. 書式、字体、枚数など

- ・投稿原稿はA4用紙横書き、MS Wordで、天地左右に2.5cm(1インチ)のマージンを取り、1ページ25行の設定として下さい。
- ・字体は、本文・注のいずれにおいても、和文をMS明朝、英文をCenturyとし、ポイントは12ポイントを使用して下さい。
- ・投稿原稿の長さは、上記の設定で、論文、書評論文の場合は32ページ以内、研究ノート、書評の場合は16ページ以内です。なお、図表、注、参照文献もこのページの制限内に収めて下さい。
- ・英数字、マルカッコ、コンマ、コロンの後には半角文字をお使い下さい。(なお、一重カギカッコ(「」)、二重カギカッコ(『』)、ヤマカッコ(〈〉)は全角文字をお使い下さい。)
- ・コンマ、コロンの後には半角1文字分のスペースを空けて下さい。また、文末のピリオドの後には半角2文字分のスペースを空けて次の英文を始めて下さい。
- ・カッコの前後には基本的にスペースを入れる必要はありません。また、欧文と和文の境目も同様にスペースを入れる必要はありません。但し、地の文及び参照文献表で文献に言及する際は、年号を示すカッコの前に半角1文字分のスペースを入れて下さい。(例えば、地の文では、「鈴木(2008)では、…」のように、また、参照文献の箇所については、「鈴木繁幸(2008)「英字新聞ヘッドラインで使用されるレトリックについて—スポーツ欄を考える」『日本英語英文学』第18号、17-28.」のようになります。下記、「2. 注、参考文献など」もご参照下さい。)
- ・原稿の1ページ目は中央にタイトルの後、氏名、ご所属などは記さず(それらの情報や謝辞などは表紙に記されて下さい)、その後、1行アケで本文を始めて下さい。
- ・各節、注、参照文献の前後は1行空けて下さい。
- ・例文の前後は1行空けて下さい。
- ・注は、日本語論文の場合、句読点の前に、「……と考えられる<sup>1</sup>。しかし、Chomsky (1986)では<sup>2</sup>、……」のように、注番号の前後にカッコなどを付さず、上付けとして下さい。英語論文の場合、punctuation の後に、“... is discussed in Chomsky (1986),<sup>1</sup> but here I will claim that IP is a barrier as well.”のように、注番号の前後にカッコなどを付さず、上付けとして下さい。
- ・「はじめに」あるいは「序論」は(0節からではなく)「1. はじめに」のように、1節から始め

て下さい。

- ・小節番号は、「3.1. 代案」のように、数字の後にピリオドを置いて下さい。

## 2. 注、参照文献など

- ・注は参照文献の前にまとめて載せて下さい(脚注形式ではなく尾注形式として下さい)。
- ・参照文献(引用文献や参考文献とはせず)は本文中で引用したもののみをお載せ下さい。
- ・英語の文献、日本語の文献を混在させてアルファベット順に並べて下さい(別々に分けしないで下さい)。
- ・同一著者名の場合でも「... (2005)『ロックを「読む」』東京: 弦書房。」などとせず、「植村 洋 (2005)『ロックを「読む」』東京: 弦書房。」のように著者名を繰り返して下さい。
- ・共著者の場合、英語は&ではなく and、日本語は中黒点(・)をそれぞれ使用して下さい。
- ・雑誌については日英語を問わず、巻数、号数、ページ数を明記して下さい。

## 3. 注と参照文献の例

以下、注と参照文献の例を示しておきます。なお、文献例は日本語文献を中心に挙げてあります。

### 注

1. 伊勢村定雄(私信)によると、以下の例は……。
2. 藤田 (2006)にも指摘されている通り、……。
3. Kuno and Takami (1993)では(i)の反例として(ii)が挙げられている。

(i) \*Pictures of himself<sub>i</sub> don't portray John<sub>i</sub> well.

(ii) To John's disgust, a story about himself<sub>i</sub> in the Boston Globe portrayed him<sub>i</sub> as a small-town politician.

(Kuno and Takami 1993: 157)

### 参照文献

〈単著・編著〉

鈴木雅光 (2000)『例外の文法』東京: 東京精文館.

Nomura, Tadao (2006) *ModalP and Subjunctive Present*. Tokyo: Hituzi Syobo.

永谷万里雄・清水和子・仙土真由美・松倉信幸・鈴木繁幸・木内 修編 (2006)『言語と文学の饗宴: 岡田春馬先生帝京大学名誉教授就任記念論文集』東京: DTP 出版.

Brinton, Laurel and Minoji Akimoto (eds.) (1999) *Collocational and Idiomatic Aspects of Composite Predicates in the History of English*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

〈編著書収録論文〉

伊藤達也 (2010)「不定名詞の作用域」藤田崇夫・鈴木繁幸・松倉信幸編『英語と英語教育の眺望』142–156. 東京: DTP 出版.

Iwamoto, Noriko (2010) “The Use of Debate in English Writing Class.” In Takao Fujita, Shigeyuki Suzuki, and Nobuyuki Matsukura (eds.) *The Future of English Studies*, 8–19. Tokyo: DTP Publishing.

〈学会誌論文〉

松倉信幸 (2007)「英和辞典における感情を表す過去分詞形容詞の表記」『日本英語英文学』第 17 号、17–26.

Shibuya, Kazuro (2008) “Changes of Motivational Intensity in Learning a Foreign Language—A Study of University Students in Japan.” *Studies in English Linguistics and Literature* 18: 1–16.

〈大学紀要論文〉

藤田崇夫 (2003)「副詞化した albeit」『浜松短期大学研究論集』第 59 号、247–256. 浜松短期大学.

〈月刊誌収録論文〉

野村忠央 (2004) 「仮定法現在節における〈have・be+not〉語順再考」『英語青年』第 149 巻 11 号、694–696.  
東京：研究社.

中澤和夫 (1988) 「述詞の位置の前置詞句 (1)」(英文法研究の最前線 39)『英語教育』6 月号、70–72. 東京：大修館.

〈学会等のプロシーディング〉

外池滋生 (2003) 「係助詞に関するいくつかの推測—文中詞と文末詞の間で—」*KLS* 23: 252–260. 関西言語学会.

〈口頭発表〉

土居 峻 (2009) 「ケンペル『日本誌』における日本語」日本英語英文学会第 19 回年次大会発表ハンドアウト.

〈書 評〉

野村忠央 (2004) 「書評：秋元実治著『文法化とイディオム化』東京 ひつじ書房 2002 年 vi+267pp.」『近代英語研究』第 20 号、105–115.

#### 4. 附則

この内規は 2012 年 10 月 1 日から運用し、『日本英語英文学』第 22 号より適用する。

改正後の内規は 2014 年 4 月 1 日から運用し、『日本英語英文学』第 24 号より適用する。

2016 年 4 月 1 日、英語教育学論文用内規の施行にあたり、事務局長の責に於いて文言の微調整を行った。